

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Morphological changes of sahen-verbs revisited

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田野村, 忠温, TANOMURA, Tadaharu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002215

サ変動詞の活用のゆれについて・続

——大規模な電子資料の利用による分析の精密化——

田野村 忠温
(大阪大学)

キーワード

サ変動詞, 活用のゆれ, 大規模な電子資料, 国会会議録, Web コーパス

要 旨

この数年来, コーパスに基づく日本語研究を取り巻く環境は急速な進展を見せている。利用可能な電子資料の面で言えば, 広義コーパス・狭義コーパスともに選択の幅が広がりつつある。

この小論では, 最近利用可能になった2種類の大規模な電子資料——国会会議録のデータと, 筆者の試作した巨大な Web コーパス——を用いて一字漢語複合サ変動詞の活用のゆれの問題の主要部分を調査・分析する。この問題については過去の拙論で朝日新聞6年分の記事データに基づく分析を行ったことがあるが, そのときには確かめようのなかった活用のゆれの通時変化の様相を観察することができるとともに, 筆者が「属する」類と呼んだ一群の動詞については五段活用化の進行の程度に基づく下位分類をさらに精密化することができることを示す。

1. はじめに

拙論(2001)において, 一字漢語複合サ変動詞の活用のゆれの問題を朝日新聞6年分(1987～1992年)の記事データに基づいて分析した。

その後, 特にこの3～4年来, 日本語の研究に利用できる電子媒体の言語資料が広義コーパス・狭義コーパスともに種類を増してきた¹。この小論では, 最近利用可能になった2種類の大規模な電子資料(広義コーパス)を用いて一字漢語複合サ変動詞の活用のゆれの問題の主要部分をあらためて分析し, 前稿——拙論(2001)を以後そう呼ぶ——で使った資料からは見えてこなかった新たな事実がそれぞれの資料の調査によって明らかになることを示す。

2. 国会会議録データに基づく分析——状況の推移の調査と分析の精密化

国会会議録は1947年以来の国会の本会議・各種委員会の議事を文字化した資料で, 国立国会図書館の Web サイトから取得することができる。そのデータ量は2008年10月現在で約7ギガ(=70億)バイト, 文字数にして約35億字である。前稿で用いた朝日新聞6年分の記事データの総量は約600メガ(=6億)バイト, 文字数にして約3億字であったので, 国会会議録のデータはその10倍余りの分量ということになる。

この国会会議録データを1940年代から始めて10年ごとに区分して利用し(1940年代と2000

年代は10年分に満たない), 一字漢語複合サ変動詞の活用のゆれの時間的推移の様子を探ってみる²⁾。

一口に一字漢語複合サ変動詞の活用のゆれと言っても, いくつかの場合に分けて考える必要があるのであるが, ここでは, そのうちで最も複雑で興味深い様相を示す, 前稿で「属する」類と呼んだものと, 所属する動詞がそれに次いで多い「信ずる」類とを取り上げる。

2.1. 「属する」類の五段活用化

この類に属するのは, 「愛圧逸臆科課介解害画冠関期帰喫窮御供遇屈解激決抗察死資持辞失謝熟処称証賞食制接絶奏即属存墮対題託達脱微呈適徹毒熱廢排発罰反比表評貧付復服偏減面模目訳有要擁浴利律略類勞和」などの一字漢語に「する」を加えてできた複合サ変動詞である。

この類の動詞は, 「属する>属す」「属しない>属さない」「属すれば>属せば」「属しよう>属そう」のようにサ行変格活用からサ行五段活用への変化の過程にある。しかし, その変化の進行の度合いは動詞によって大きな差がある。

2.1.1. 前稿での分析

前稿では, 朝日新聞6年分の記事データを用いて一字漢語複合サ変動詞の活用のゆれの分析を試みた。少々長くなるが, 「属する」類の五段活用化に関する分析結果の一部を以下に引用する。引用中で言及されている(表B-1)はスペースの節約のために省く。下線は今回の引用に際して加えたものである。

さて, 従来の分析において「サ変動詞の五段化は見られるけれども, 語により, 活用形によりまちまちで, 複雑な様相を呈しているのが現状である」(松井1987)と述べられている通り, (表B-1)の統計を一瞥しての印象では2通りの形の使い分けは動詞ごとに気紛れに決まっているかのようである。しかしながら, 用例数の分布を注意して見れば, 「Xしない」になるか「Xさない」になるかは実は一字漢語「X」の発音に依存して決まっていることが分かる。結論を先に言えば, それは,

(2) (i) 「X」が促音・撥音・長音を含む場合は「Xしない」になり,

(ii) それ以外の場合は「Xさない」になる。

という強い傾向があるということである。この(i)と(ii)の区別に基づいて(表B-1)を書き直すと(表B-2)のようになる。

(i)に該当するのは, 「逸喫屈決失接達脱微発罰律」(以上, 促音), 「冠関存反偏面」(撥音), 「供制奏有要」(長音)などを含む場合であるが, 「Xしない」と「Xさない」の用例数をそれらすべての語について合算すると828対12となり, 「Xしない」が全体の98.6%を占めている。逆に, (ii)に該当する語の場合には, 「Xしない」と「Xさない」の用例総数は43対1,021で, 「Xさない」の比率が96.0%となっている。(ii)のうち特に漢語が1拍語である「科課持辞処付利」の場合には, 計712例の用例が例外なく「Xさない」となっている。

(2)に述べた排他的な傾向は, 「Xしない」と「Xさない」の関係だけに関わるものではない。(2)は, 一般的には,

(表 B-2) 「Xしない」「Xさない」

(i)			
逸しない	3	冠さない	1
関しない	3		
喫しない	2		
供しない	1		
屈しない	113	屈さない	1
決しない	2		
失しない	11		
制しない	1		
接しない	8	奏さない	4
存しない	2		
達しない	331		
脱しない	2		
徹しない	1		
発しない	16		
罰しない	11		
反しない	201	反さない	1
偏しない	15	偏さない	3
面しない	1	面さない	1
有しない	59	有さない	1
要しない	44		
律しない	1		
(ii)			
		愛さない	22
		科さない	5
		課さない	116
介しない	5	介さない	39
害しない	5	害さない	15
		画さない	2
		持さない	1
		辞さない	562
		熟さない	8
		処さない	2
		即さない	5
属しない	23	属さない	123
		託さない	1
適しない	8	適さない	82
		付さない	25
服しない	1	服さない	5
		訳さない	6
浴しない	1	浴さない	1
		利さない	1

- (3) (i) 「X」が促音・撥音・長音を含む場合はサ変のままであり、
(ii) それ以外の場合はサ五に変化している。

ということの意味するものと考えられ、実際以下で見られるように、従来無秩序な現象と捉えられてきた「属する」類の形態のゆれはかなりの範囲にわたって(3)の原則によって統一的に説明が付く。ちなみに、(i)と(ii)とで五段化の程度に明確な差が見られる理由は明らかではないが、それを推測するに、(i)の場合には促音・撥音・長音の存在が和語の動詞との異質性を際立たせ(中略)、そのことが五段化をもたらす類推を阻んでいるということかも知れない。

このように、「属する」類の動詞のあいだに見られる五段化の程度差は音韻的に条件付けられており、「属する」類はその観点から(i)と(ii)の2つの下位類に分けられるというのが前稿で得られた結論であった。

2.1.2. 国会会議録データに基づく調査の結果

前稿の分析は1990年前後の新聞記事のデータに基づいていたわけであるが、今回国会会議録のデータに基づいて過去60年間における「属する」類の動詞の五段化の比率——ここでは特に、上の引用にもあった、否定表現における「Xしない>Xさない」の変化を取り上げる³——の推移を調べてみたところ、次頁の図1に示すような結果が得られた。凡例中の一字漢語は1940年代における五段化率の高さの順に並べてある。また、一字漢語とグラフの線の対応を分かりやすくするために、図中にも直接一字漢語を書き入れている(五段化率が全期間を通じて10%未満のものを除く)。

ここでは、すべての年代において「Xしない」と「Xさない」の用例数の和が10以上である動詞だけを示している。目立って不規則な動きを示すグラフ線は用例数の少ない語に集中している⁴。

なお、機械的な処理の関係で問題を伴う少数の動詞——例えば、「帰さない」は「きさない」と「かえさない」の2通りの可能性がある——は除外している。

2.1.3. 考察

図1からはいろいろなことが分かる。以下では、図にも書き入れてある通り、一字漢語、すなわち「Xする」の「X」の部分が1拍語であるものを「I類」、2拍語で特殊拍を含まないものを「II a類」、特殊拍を含むものを「II b類」とする。

まず、各類とも時間とともに五段化の率が高まっている。これは予想に従うことであるが、それが現に事実であることが確認でき、その具体的な進行の様子を見ることができる。

次に、1990年前後の新聞記事データに基づいて分析した前稿ではI類とII a類を一括して(ii)としたが、両者のあいだには五段化の進行状況に差があったことが分かる。先の引用中の最初の下線部にある通り、前稿での調査の際にもI類の動詞の五段化率が特に高いことは観察できたが、用例数が少なく偶然の可能性も排除できなかつたのでII a類の動詞とのあいだに差があると

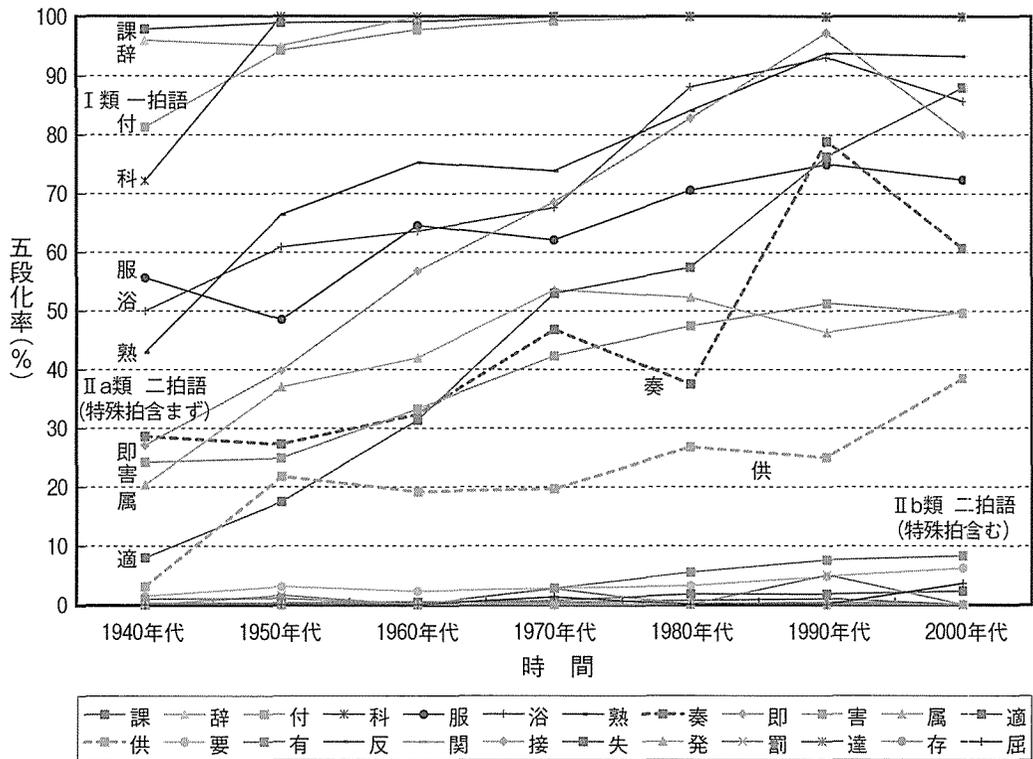


図1 国会会議録データに見る「属する」類の動詞の五段化率の推移

まで結論付けることはできなかった。しかし、図1によれば、I類の動詞はすべて1940年代にすでに五段化率が70%を超えていて1970~1980年代ごろまでには五段化が完了したのに対し、II a類の動詞は1940年代における五段化率は60%未満で今もなお五段化の途上であり、また、語によって大きな遅速の差が見られるというように、両者のあいだには明確な相違があったことが確かめられる。

II b類の動詞、すなわち、前稿の(i)は五段化が全般に遅れていることが図1からも確認できるが、例外的に「奏」「供」は五段化の進捗が大きい。それらが例外となっていることの原因は明らかではないが、前者はもっぱら「功を奏する」という固定的な形で使われているということが関係している可能性が考えられる。後者についても用法は「用に供する」「食用に供する」「公共に供する」などの少数のパターンに限られる。理由はともあれ、そうした例外的な振る舞いを見せる語の存在を確認することができる。

以上のようなことが国会会議録データの調査結果から見えてくる。同データに基づいて「属する」類の活用のゆれの推移の全貌を知るためには動詞に「ない」が続く場合以外の多数の文脈についても調べる必要があり、図1に限ってもさらに細かく検討する余地があろうが、ここで確認すべき重要な点は、こうして過去60年間の状況の推移を見ることにより、1990年前後の一時期の状況だけを見ていたのでは知り得ない現代日本語の変化の様相を明らかにすることができる

ということである。国会会議録データという大規模な電子資料が、数十年間という比較的短い期間における現代日本語の通時変化を量的な裏付けに基づいて論じることが可能にする、日本語研究にとって貴重な資料であることがこの一例だけからでも確かめられる⁵。

2.2. 「信ずる」類の上一段活用化

前稿で「信ずる」類と呼んだのは、「信ずる」「感ずる」「生ずる」「応ずる」「動ずる」などに代表される一群の動詞で、これらは「信ずる>信じる」のように上一段活用化の過程にある。ただ、「信ずる」類の動詞のあいだに見られる上一段化の遅速の差の原因は何かという問いに対しては、“日常的によく使われる語の場合に上一段化の進行が早いという傾向が認められる”という程度の回答しか与えることができなかった。

国会会議録データに基づく分析によっても残念ながらその問いに対する満足な解決は得られなかったが、図2に示す「信ずる」類の上一段化の時間的な進行の様子は知ることができた。ここでは、すべての年代において「Xずる」と「Xじる」の用例数の和が20以上であるものだけを取り上げている。凡例中の一字漢語は2000年代における一段化率の高さの順に並べてある。

図2から、「信ずる」類の各動詞が過去60年間に、個々の動詞による遅速の差はあるにせよ、一斉にしかも徐々に加速しつつ一段活用に向けた変化を続けていることが確認できる。60年前と現在とにおける一段化率の差は筆者の事前の予想を大きく上回るものであった。

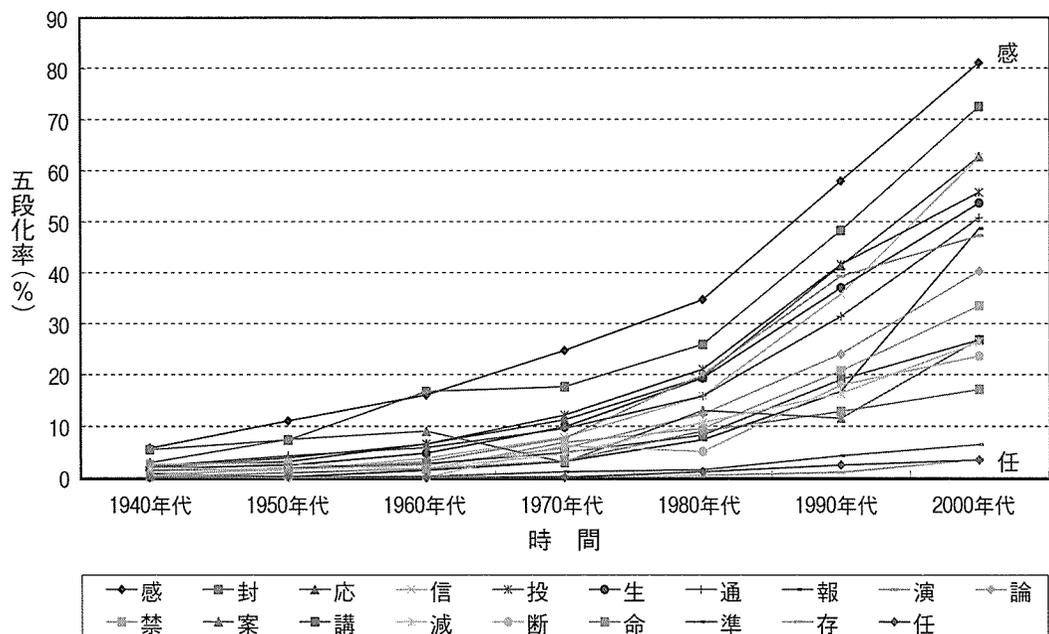


図2 国会会議録データに見る「信ずる」類の動詞の一段化率の推移

3. Web コーパスに基づく分析——分析のさらなる精密化

3.1. Web コーパス

インターネット上にある文書の総量は莫大であり、それが年々拡大している。言語資源としての大きな可能性を秘めたそうしたインターネット文書を従来日本語研究者が研究に利用するときにはサーチエンジンを用いて用例を検索するという方法が一般的であった。この方法には簡便性というメリットはあるが、同時に数々の問題点がある。中でも、思い通りの条件での検索ができない（正規表現も使えない）ことはインターネットを日本語研究資料として用いる可能性を制限し、また、サーチエンジンの示すヒット件数の信頼性に深刻な問題があることはそれに基づく分析の信頼性を損なう⁶。

そうしたことから、筆者はインターネット上の日本語文書を収集してコーパスとする可能性に取り組んでみた。試作した Web コーパスのデータ量は 2008 年 10 月現在で約 150 ギガ（= 1,500 億）バイト、文字数にして約 750 億字である。ここではそのうちの約 100 ギガバイト、約 500 億字分を使う。この分量は、朝日新聞 6 年分の記事データの約 170 倍、国会会議録データ全体の約 14 倍に相当する⁷。

以下では、この Web コーパスを用いて「属する」類の五段化の比率を調査した結果について述べる。なお、「信ずる」類の動詞に見る一段化の遅速に関しては、Web コーパスを用いて調査しても特筆すべき知見は得られなかった。

3.2. Web コーパスに基づく「属する」類の活用の変化の分析

表 1 は、Web コーパスから得られた「属する」類の否定表現における五段化の比率である。ここでは、「Xしない」と「Xさない」の用例数の和が 30 例以上のものだけを示している。新聞記事データや国会議事録データによる調査の場合に比べて用例数が桁違いに多いことに注意されたい。

表 1 の形のままでは新しいことは何も見えてこないが、一字漢語の音韻的な種類と、10%単位で区分した五段化の比率の程度——ただし、該当語数の多い 10%未満の部分はさらに二分して 5%単位とする——という 2 つの基準に基づく $5 \times 11 = 55$ 通りの組合せのそれぞれに該当する一字漢語を表の形に書き出してみると表 2 のようになる。

一字漢語が大きくは左上から右下にかけての分布を示す表 2 から、長母音を含む 2 拍語と促音または撥音を含む 2 拍語とでは、五段化の程度に差があることが見て取れる。すなわち、両者の五段化率の分布はかなり重複するが——具体的には 5%超 50%以下の範囲において重複している——、その上限と下限に関しては違いがあり、長母音を含む場合のほうが促音・撥音を含む場合よりも全体として五段化の比率が高くなっていることが分かる。「～き」「～く」の形の 2 拍語と「～い」の形の 2 拍語のあいだにも、それに似た関係があるように見えなくもないが、こちらについては動詞の数が少ないので確かなことは言えない。

とすれば、「属する」類の動詞は五段化の進行の程度に基づいて、1 拍語、特殊拍を含まない 2 拍語、長母音を含む 2 拍語、促音または撥音を含む 2 拍語、という 4 つの類に分けられること

表1 Webコーパスに見る「属する」類の五段化率

X	「Xしない」 の用例数	「Xさない」 の用例数	「Xさない」 の比率 (%)				
				害	3617	3184	46.8
				冠	133	101	43.2
				制	94	66	41.3
画	0	69	100.0	圧	23	16	41.0
託	0	246	100.0	熱	128	71	35.7
辞	74	16538	99.6	類	48	26	35.1
科	4	882	99.5	復	39	18	31.6
課	17	3291	99.5	擁	48	22	31.4
資	3	171	98.3	喫	38	16	29.6
略	22	1196	98.2	供	643	256	28.5
付	45	1684	97.4	勞	70	21	23.1
愛	383	7163	94.9	徴	57	13	18.6
期	13	212	94.2	面	259	56	17.8
介	892	8890	90.9	偏	473	92	16.3
適	2391	21205	89.9	滅	161	27	14.4
熟	145	1215	89.3	発	8583	1190	12.2
墮	44	299	87.2	有	29112	4003	12.1
食	219	1479	87.1	対	196	23	10.5
利	8	46	85.2	逸	429	47	9.9
即	184	837	82.0	要	21847	2153	9.0
排	8	36	81.8	抗	35	3	7.9
処	18	77	81.1	窮	71	5	6.6
属	4999	19113	79.3	徹	639	37	5.5
服	475	1703	78.2	律	151	8	5.0
称	52	165	76.0	失	990	45	4.3
持	24	73	75.3	脱	1163	44	3.6
浴	57	154	73.0	屈	12522	466	3.6
呈	205	468	69.5	接	4511	159	3.4
評	15	30	66.7	察	486	17	3.4
臆	138	251	64.5	決	802	27	3.3
配	26	46	63.9	罰	3647	107	2.9
廢	19	28	59.6	存	4195	112	2.6
奏	645	738	53.4	反	18282	364	2.0
証	46	52	53.1	関	860	17	1.9
激	35	37	51.4	達	24460	352	1.4
遇	22	22	50.0	列	51	0	0.0

になる。

3.3. 「属する」類の下位区分の精密化

結局、新たな電子資料を順次分析資料とすることにより、「属する」類の五段化の程度に基づく下位区分は図3のように精密化が進んだことになる。

すなわち、前稿における新聞記事6年分のデータに基づく分析では「属する」類の動詞が五段化の程度に基づいて2つの類に分かれることが明らかになったのが、このたびの国会会議録データの調査によって3つの類への区分が可能になり、そしてWebコーパスの調査によって4つの

表2 音韻的な種類と五段化率の程度の組合せごとの一字漢語の分布

五段化率	1拍	2拍			
		～き・～く	～い	長母音	促音・撥音
90%超	辞科課資付期	画託略	愛介		
～90%	墮利処	適熟食即	排		
～80%	持	属服浴		称	
～70%		臆	配	呈評	
～60%		激	廃	奏証遇	
～50%			害	制	冠圧
～40%		復	類	擁	熱
～30%				供勞	喫
～20%			対	徴有	面偏減発
～10%				要抗窮	逸徹
～5%					律失脱屈接察決 罰存反関達列

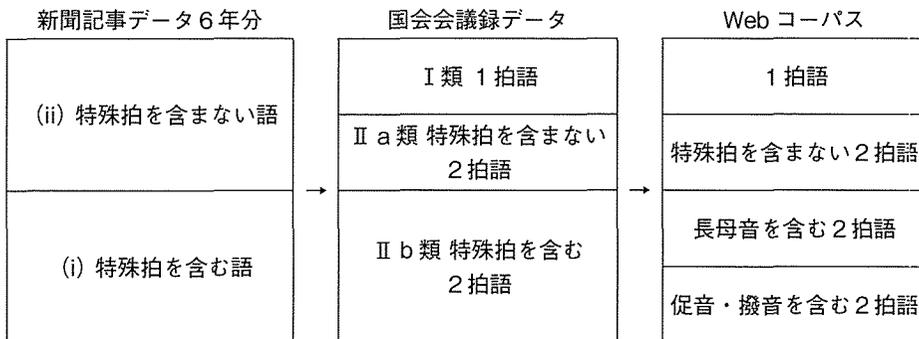


図3 新資料の調査による「属する」類の下位区分の精密化

類が認定されるに至った。

4. おわりに

以上、最近利用可能になった2種類の大規模な電子資料を用いて一字漢語複合サ変動詞のゆれの問題の主要部分を調査し、それらの資料が日本語の分析に新たな知見をもたらし得るものであることを確認した。

稿を閉じるにあたり、今回の調査にも関わる言語資料上の問題に触れておきたい。前稿においては新聞記事データ、今回は国会会議録データと Web コーパスという、それぞれ異なる性質の言語資料を使用した。言うまでもなく一般論としては、異質な資料から得られる調査結果を単純に比較することには問題があり得る。しかし、これについては次の2つのことを指摘しておくことができる。

まず、ある言語現象を複数の資料に基づいてそれぞれ異なる角度から観察・分析し、それら

の結果を総合的な見地からの考察の材料とすることは価値あることであろうし、実際コーパス以前の時代から行われてきたことでもある。現実的に言っても、利用可能な電子資料はそれぞれに質・量の両面に関して固有の特徴や制約を持つため、言語事象の観察範囲を広げ分析を深めたいというときに異質な資料の併用は避けられない。

もう1つは、言語現象の中にも、資料の種類への依存度の高いものもあればそうでないものもあると考えられるということである。端的な例で言えば、談話資料と学術論文の調査によって得られる終助詞の使用状況は互いに大きく異なるであろうが、格助詞の使用状況の調査であれば少なくともそれほどの差は認められないはずである。話し手（書き手）の無意識の選択に委ねられる面の強いであろう動詞の活用についても、あらたまった場面における意識的な言葉遣いでは古い言い回しが選ばれやすく、したがって、言語変化が通常の言葉遣いに比べて全般に遅れて進行するということはあっても、変化の論理や仕組みは資料の種類には必ずしも依存しないと考えてよいのではないかと思われる。そうしたことは拙論（2008b）でも別の事例の分析に即して述べた。

ともあれ、言語現象と言語研究資料の相関は抽象的な一般論として論じ得る問題ではない。今後さまざまな事例研究を通じて、研究のテーマや目的、使用する資料に即して具体的に検証されるべき重要な課題だと言える。

注

- 1 「コーパス」という語は、ときには言語の研究に用いられる電子媒体の言語資料全般を指すのに使われ、ときにはそのうち特に言語研究での利用のために設計・構築された資料だけを指すのに使われる。それぞれの用語法に基づくコーパスの概念を「広義コーパス」、「狭義コーパス」と呼ぶ。
- 2 国会会議録のデータを日本語研究に用いるうえで注意を要する問題点については松田編（2008）、拙論（2008b）を参照されたい。
- 3 ほかの言い回しでなく「Xしない>Xさない」の場合の変化を取り上げるのは、それが一字漢語複合サ変動詞の五段化における音韻的な条件の関与を最も明瞭に観察できる言い回しであることによる。前稿で述べたように、「属する」類の動詞の活用の変化は全体としては複合的な現象で、一部の場合においては例えば文語の残存といった要因も考慮に入れる必要がある。「Xしない>Xさない」は音韻的な条件だけで五段化の遅速をきれいに説明することができるケースの1つで、しかも、そうしたケースのうちで最も用例数が多い。「Xしない>Xさない」に関して見られる統計的な傾向は同類のその他のケースにもあてはまり、その意味で当該の類のモデルケースと言うことができる。
- 4 用例数の多少の程度を示すために、1990年代の用例数を掲げる。年数の少ない1940年代を別とすれば、ほかの年代における用例数もほぼこれと同程度である。

X	「Xしない」 の用例数	「Xさない」 の用例数	「Xさない」 の比率 (%)	属 供	122 18	105 6	46 25
課	0	112	100	有	413	34	8
辞	0	106	100	罰	19	1	5
付	0	85	100	要	476	24	5
科	0	26	100	失	107	2	2
即	1	36	97	反	517	5	1
熟	1	15	94	達	458	2	0.4
浴	2	27	93	関	14	0	0
奏	4	15	79	接	13	0	0
適	31	100	76	発	25	0	0
服	10	30	75	存	24	0	0
害	92	97	51	屈	92	0	0

- 5 拙論（2009）で述べたように、現代日本語における文法の通時変化の調査・分析は今後コーパスの有効な活用が期待される研究領域の1つである。国会会議録データに基づくほかの種類の事例の分析については拙論（2008b）を参照されたい。
- 6 サーチエンジンの示すヒット件数の信頼性に関わる問題については拙論（2008a）を参照されたい。
- 7 Web コーパスの作成は、まずサーチエンジンにさまざまなキーワードないしキーワードの組を順次与えて検索し、それによって得られる URL が指している文書を取得し、そこから HTML タグなどの不要な情報を除去する、という手順で行った。実際の処理に際しては対処を要する各種の問題に遭遇したが、そのことについてはここでは省略に従う。

サーチエンジンに与える検索キーワードによって、得られる文書の性格は異なってくる。基本的には、総体として大きな偏りがないと思われるキーワード群を用いる方法によるものとし、それに加えて、特定の話題や文体に偏ったキーワード群に基づく文書収集も行った。前者におけるキーワード群には、種々の文章から機械的に切り出した語句を使用した。後者では、もっぱら特定のジャンルなどに特徴的な表現をキーワードとした。試作した約 150 ギガバイトの Web コーパス全体に占める両者の比率は 2:1 であり、この小論では偏りの少ないキーワード群を用いて作成した約 100 ギガバイトのデータを分析に用いる。

文 献

- 田野村忠温（2001）「サ変動詞の活用のゆれについて——電子資料に基づく分析——」『日本語科学』9, 9-31, 国書刊行会
- 田野村忠温（2008a）「日本語研究の観点からのサーチエンジンの比較評価—— Yahoo! と Google の比較を中心に——」『計量国語学』26-5, 147-157, 計量国語学会
- 田野村忠温（2008b）「大規模な電子資料に見る現代日本語の動態」『待兼山論叢』42 文化動態論篇, 55-76, 大阪大学大学院文学研究科
- 田野村忠温（2009）「コーパスと文法研究」『国文学解釈と鑑賞』74-1, 79-87, 至文堂
- 松井利彦（1987）「漢語サ変動詞の表現」『国文法講座 6 時代と文法——現代語』181-205, 明治書院
- 松田謙次郎編（2008）『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房

付 記

本稿は文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」の日本語学班研究会（千里朝日阪急ビル，2008年2月17日）での発表内容の一部である国会議事録データに基づくサ変動詞の活用のゆれの分析に，その後作成したWebコーパスに基づく分析を新たに加えてまとめたものである。2名の査読者の方からのご指摘，ご助言に基づいて当初の原稿にあった誤りを正し，記述を改善した。ここに記して謝意を表したい。

（投稿受理日：2008年10月22日）

（最終原稿受理日：2008年12月8日）

田野村 忠温（たのむら ただはる）

大阪大学大学院文学研究科

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

Morphological changes of *sahen*-verbs revisited

TANOMURA Tadaharu

Osaka University

Keywords

sahen-verb, morphological alternation, large corpus, *Kokkai Kaigiroku*, Web corpus

Abstract

The morphological changes of compound *sahen*-verbs with a one-letter sino-word stem are re-analyzed based on two kinds of electronic texts of large size.

In the first half of this paper, the results of an analysis of the verbs of the *zoku-suru* group based upon the texts of *Kokkai Kaigiroku*, the minutes of the National Diet of Japan, are described. It was found that, using the *Kokkai Kaigiroku* data, we may observe the way the morphological change of the *zoku-suru* group proceeded during the past sixty years. We were also enabled to make the author's previous synchronic analysis of the *zoku-suru* verbs more precise and make a three-way, rather than two-way, distinction among the verbs of the *zoku-suru* group according to the degree of morphological change. In addition, the results of an analysis of the verbs belonging to the *sin-zuru* group are also discussed briefly.

In the second half of this paper, the morphological changes of the *zoku-suru* group are analyzed using a huge Web corpus, which was created by the author recently. Using this, we were able to observe the differences in the degree of morphological change of individual verbs even more precisely, thus finding a four-way distinction among the verbs of the *zoku-suru* group.